雅楽だより

《目次》

●歌舞音曲　宮内庁式部職楽部首席楽長　東儀博昭　1
●国風歌舞について　寺内直子　1
●笙の和音的解明　下-2　芝祐泰　4
●情報欄　6
●ヨシ原焼き　8
●新刊　8

第53号　2018（平成30）年4月
発行　雅楽協議会

歌舞音曲

宮内庁式部職楽部首席楽長
東儀　博昭

（3月3日　国立劇場雅楽公演『国風歌舞』プログラムより）

平成三年、国立劇場の第九回音曲公演で行った『東遊一具』と平成二年大饗の儀で催された『五節舞』『久米舞』の歌舞が、本公演では国立劇場による舞台演出にて、皆様に御覧頂ける運びとなりました。

今回の演目についての、思い出やエピソード等を執筆して欲しいとの御依頼を受けて、少しお話をしたいと思います。

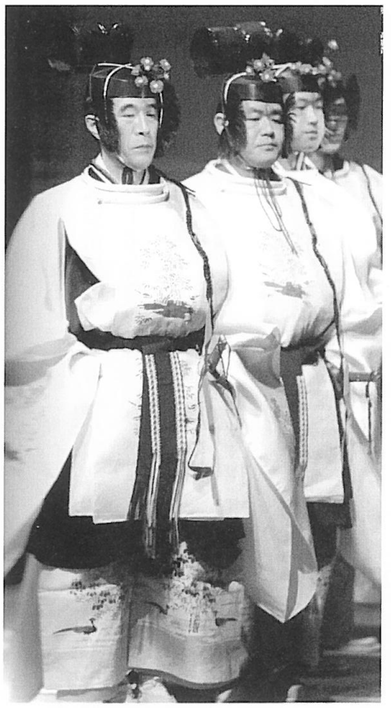
先ずはこの演目全てに使用する楽器「和琴」と、「国風歌舞」との関連に着目しました。明治九年（一八七六）の撰定譜を見ますと、「和琴譜」には『東遊大和歌和琴譜』と有りまして、目次には今回の演目三曲（『東遊』・『大歌』・『久米歌』）だけが記載されて居り、意義深い公演となると思います。

国風と云われる舞には、唐楽や高麗楽といった舞楽のように、左方の舞人は、舞台左側から現れ左足から登台し「秋風に紅葉が吹いている様に音楽の旋律に合わせて舞う」、右方の舞人は舞台右側から現れ、右足から登台し「楊柳が春風に揺られている様に音楽のテンポに合わせて舞う」といった区別は無く、左方右方の舞人が一堂に会して舞人を務めるのが特徴です。楽師は鍛錬してきた舞い方が身体に染み込んでいますので、各々の舞姿に現れて見えると思います。

『東遊一具』

この歌には和琴、笏拍子、篳篥、高麗笛の楽器が各々一つずつで歌と共に加わります。

（2ページ上段へ続く）



東遊を舞う東儀博昭氏
左より2人目　写真　林陽一

国風歌舞について

神戸大学教授　寺内直子

（3月3日　国立劇場雅楽公演『国風歌舞』プログラムより）

「国風歌舞」と書いて「くにぶりのうたまい」と読む。やまとことばのやさしい響きの中に、古代のおおらかな旋律や舞振りを想像する人も少なくないだろう。現在「国風歌舞」の語は、唐楽、高麗楽などアジア大陸から伝わった外来の歌舞と対比して、日本列島に古くから存在する歌や舞を起源とする歌舞を指して使われている。それらは実際には、御神楽（神楽歌）、東遊、大直日歌、倭歌（倭舞）、誄歌、大歌（五節舞）、久米歌（久米舞）など個別の演目として宮内庁式部職楽部で伝承されている（注一）。いずれも宮中祭祀と深く結びついており、御神楽は四月三日の神武天皇祭や、十二月中旬の御神楽之儀など、東遊は春分の日と秋分の日に行われる皇霊祭など、大直日歌と倭舞は、十一月の鎮魂祭、誄歌は天皇の大喪、五節舞と久米舞は、新帝の即位の大嘗会で演じられる。

（3ページ上段へ続く）

（1ページ下段11行目より）

この時の和琴の調絃は、唐楽と違い、笙からでは無く、高麗笛から宮（基音）を取ります。高くも低くも、笙が無いので高麗笛で吹かれた音程に従い歌われます。

東遊の舞は駿河歌と求子歌に舞われます。先ず駿河歌で舞人が舞いながら角々を廻って仮座に戻って歌が終ると、次の求子歌の音取が始まります。この篳篥と高麗笛の合音取を奏している間に舞人が一斉に装束の袍の右肩を開け、着替えをする所作が有ります。

この音取を「加太於呂志」と呼びますが、曲が短いので、俊敏且つ優雅に余裕を持ってやり遂げなくてはならないという、緊張する場面であります。この舞で浮かんでくるのは恩師の教えです。『東遊一具』は屋外で行われます。「庭立」といって、白玉砂利の上の（白砂舞台）で執り行われる為、足元が砂地に埋もれて不安定になってしまいますが、恩師曰く「上手な舞人ともなれば、例え足元が砂地であろうと、一切足跡を付けず残さず舞い終えるのだよ」と諭されて感心した思い出があります。確かに舞の足さばきには「飛」とか「突」といった足用法は出てきませんので、重心の安定と、上手な体重移動を絶えず心がければ可能だと一生懸命取り組んだ事を覚えています。

東遊　表袴　写真　林陽一

『五節舞』

『五節舞』は五人の舞姫が静々と優美に舞う華麗な舞です。古くは公卿・国司・華族等の令嬢が舞姫を務めたと記されて居ります。

楽部の楽師は男たちばかりな為、舞人の選出で苦労していた事が思い出されます。

そこで大饗の儀に於いては、雅楽を代々世襲として伝えてきた「楽家」の中からも『五節舞』を舞える適齢の女子の協力をお願いする方が、家業が雅楽という事で親しみと認識・自覚を持って取り組んでもらえるだろうと成りました。

『五節舞』は重い装束を着付けるので、動きにくい上に、檜扇を翳して移動する所作をゆったりと行わなくては成らない辛い立居振る舞があり、思った以上に重労働な舞です。

『五節舞』には『大歌』という曲が使われます。和琴、笏拍子、篳篥、龍笛が各一つずつ歌の伴奏をします。舞はゆったりとした動きの足使いと、上半身は両手を広げたり、高く上げたりする手振りの動きに終始します。

この舞のお稽古を見守っていた父親である先輩楽師は「ご息女」の舞振をどのような気持ちで見ていたのでしょうか、と思います。

今回は「雛の会」の舞姫たちに「嫋やかに舞っていただきます。

『久米舞』

『久米舞』は主に『五節舞』と併せて演じられる舞です。思い出は大饗の儀で舞った時の事です。

『久米舞』の舞人装束は目に鮮やかな紅色の袍が一番目立ちますので、位の高い赤袍を着付けられて舞える事に栄誉を感じたものでした。

この舞には糸鞋ではなく「鞾」と呼ぶ深沓を履いて舞台に上がるのですが、神聖なる舞台に土足で登台してしまったような罪悪感を抱いた事を思い出します。

『久米舞』には、和琴、笏拍子、篳篥、龍笛の楽器が、一つずつ歌の伴奏として入ります。

曲の中程、揚拍子の後に和琴と舞人だけでの「抜剱」という所作が久米舞の見所の一つかと思います。この抜剱には、いかに気魄を込められるかが、和琴と舞人の間に掛って来ます。腰に帯びている『久米舞』の太刀は、白鮫皮の柄に五三桐の目釘があり、鞘には金梨地に鳳凰の蒔絵と螺鈿細工が施された全長九十六センチ程の美しい物です。これをいざ鞘から抜いてみると案外短く感じます。刃渡りが四十八センチ程でしか有りません。この装束の紅色に照らされた太刀は美しく輝き、そして和琴との丁々発止と成る様は、見栄え良く御覧頂ける事だと思います。

今回の演目『東遊一具』『五節舞』『久米舞』の舞はとても稀有な物でいずれも見応えの有る舞ですが、それに付随します各々の歌方にも興味深く耳を傾けて頂きたく存じます。

三曲とも組曲構成の歌謡ですが『東遊一具』の最初の一歌の始めは「平調」の音（E）から、そして二歌になると歌の途中から拍子の音が、一オクターブ上の音程で歌い出して二部合唱と成り、東遊の優雅な遊びが始まります。

『五節舞』の『大歌』の参音声の始めは、「壱越調」の音（D）から始まり、女性の舞を支える様に力強く歌われます。

『久米歌』の参音声の始めは「黄鐘調」の音（A）から発せられ伸びやかに歌われます。

各曲の特色有る節回しや歌い方が全て異なって歌唱され、和琴の奏法も異なりますので微細まで全て聴き漏らす事の無き様、歌舞音曲をお楽しみ下さい。

久米舞　袴　写真　林陽一

（1ページ　下段末より）

これらの歌舞に共通して見られる特徴は、まず、奈良時代、平安時代に遡る、古い日本語の歌詞（詳しくは個々の演目解説を参照）を持つ歌謡を中心とすることである。発声はあくまで自然でのびやかである。演目のほとんどは、複数の歌曲と器楽の前奏、間奏などから成る組曲形式である。大直日歌、誄歌以外は舞がある。

歌の伴奏や前奏、間奏などには楽器を用いるが、その半分は日本固有の楽器、残りは外来の楽器である。前者には笏拍子、神楽笛、和琴、後者には龍笛、高麗笛、篳篥がある。演目ごとに用いる楽器は微妙に異なる（表参照）。私たちの祖先は、国風歌舞にも唐楽や高麗楽で用いる楽器を必要に応じて取り入れたわけだが、笙や各種の打楽器類は採用しなかったことを考えると、そこには、もとから具わっていた「くにぶり」の音楽の雰囲気を損なわい、周到な配慮と美意識があったように思われる。

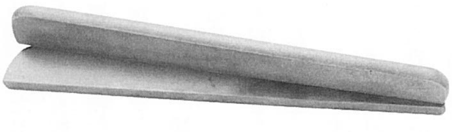
笏拍子は貴族の持つ笏を二つに割った形状で、まわりの空気を引き締めるような鋭いパチンという音がする。神楽笛は大和笛とも言い、やわらかな音色が特徴である。和琴は六絃の「コト」で、絃を固定する尾部が鳥の鵄の尾に似ており（写真）、この形状は弥生時代の遺跡から出土した遺物に酷似している。

和琴の調絃は、他の「コト」の仲間のそれとは異なり、第一～第六絃まで、音高順に並んでいない（譜）。また、奏法も独特で、琴軋と呼ばれるヘラ状のバチで六絃を一気に掻き鳴らし、そのあと一絃だけ残して他の絃の音を止めるという奏法を多用し、その合間に、左手の指で絃を弾く奏法をまじえる。現在、ほとんどの国風歌舞は和琴を伴奏とするので、和琴の音が国風歌舞全般を特徴づける「くにぶりの音」と言っても過言ではないだろう。「コト」を霊力が宿る神聖な楽器と考えた記紀神話以来の信仰が、こんなところに密かに息づいているように思える。

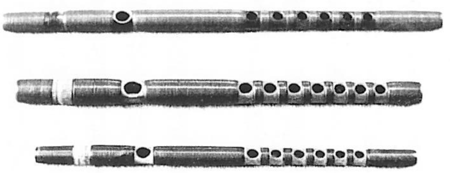
装束の点でも、国風歌舞は外来の唐・高麗の舞楽装束とは趣を異にする。絢爛豪華な刺繍を施したり異形の面を用いることはせず、シンプルに公家の束帯か衣冠の様式を基調としている。その中で印象的なのは、御神楽、東遊で舞人が着る「青摺」の袍や表袴である。白地に桐、竹、雉子などの模様を青摺（プリント）しており、神事に相応しい清々しい印象を与える。倭舞では、二人が赤、二人が緑の袍を（注二）、久米舞では四人が赤い袍を着用する。一方、五節舞は未婚の若い女性によって舞われる珍しい演目である。装束は緑色の袿に赤色の唐衣を重ね、白の裳をつける、目にも鮮やかな宮中女性の盛装である。

ところで、これらの国風歌舞は宮中儀式や宮廷と関係が深い神社の儀式で演じられて来たため、中央の宮廷の芸能と考えられがちである。しかし、歴史を遡ると「くにぶり」のもう一つの意味が浮かび上がってくる。

「おくにぶりが出る」という言い回しがあるが「くにぶり」は地域独特の要素を指す。すでに指摘されているように（注三）、「くにぶり」は、奈良時代、平安時代の文献では、「風俗」という語として頻出する。たとえば『続日本紀』によれば、奈良時代、養老七年（七二三）に薩摩と大隅二国から隼人ら六二四人が朝貢に訪れ、饗宴の席で「風俗歌舞」を奏した（五月辛巳条、甲申条）。さらに興味深いことに、天平十二年（七四〇）には百済王慈敬と百済王全福が「風俗楽」を奏し、各々位が一つずつ上がった、という（『続日本紀』同年二月丙子条）。ここから「風俗歌舞」は、地方の独自の特徴を持った芸能を指すが、その際の「地方」は、日本列島内には位置するが、当時はまだ大和朝廷の範囲でなかった地域や、朝鮮半島の百済なども含んでいたことがわかる。



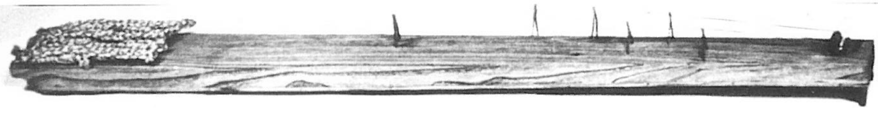
笏拍子



上から　神楽笛、龍笛、高麗笛

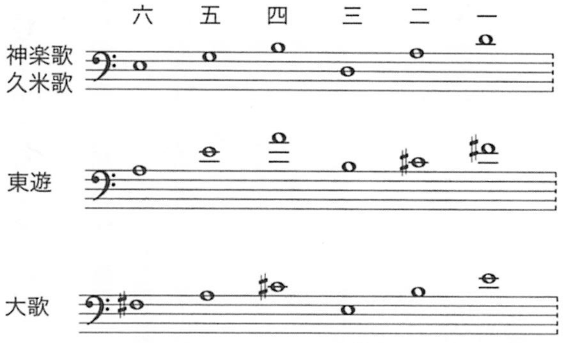
【表】用いる楽器

御神楽(神楽歌)	笏拍子	和琴	篳篥	神楽笛
東遊	笏拍子	和琴	篳篥	高麗笛
大直日歌 倭歌(倭舞)	笏拍子		篳篥	龍笛
久米歌(久米舞)	笏拍子	和琴	篳篥	龍笛
大歌(五節舞)	笏拍子	和琴	篳篥	龍笛
誄歌	笏拍子	和琴		



和琴

【譜】



和琴の調絃

また、大嘗会の折に悠紀・主基二国が「風俗歌舞」または「国風」を奏したという記録もある。(『貞観儀式』ほか)。悠紀・主基とは米等の農産物を献上するために選ばれる二つの地域で、それらの地域の特色を具えた「風俗」「国風」歌舞が、大嘗会で演じられたのである。

本日上演される東遊もともとは風俗の一種であったと考えられ、歌詞の中に「駿河なる宇都浜」など、東国の地名が登場する。倭舞は一説には、東国の東遊に対して大和地方(今日の奈良地方)の芸能を意味するとされる。また、吉野地方の国栖の人々によって伝承されていた国栖歌笛や、久米部(来目部)の人々によって伝承されていた久米舞は、芸能と特定の氏族との結びつきを示している。

このように、現在「国風歌舞」としてくくられる歌舞には、実際には様々な出自があり相互に異なる独自の様式を持っていたと推測されるが、長い年月の間に宮廷風に洗練された。しかし、なお、演目ごとに異なる歌詞や構成、装束や舞ぶりは、それぞれの世界を豊かに喚起させる。久米舞は古い戦いの勝利の記憶を語り継ぎ、東遊は東国の雄大な風景を背景に「夫子」と「妹」の交歓を描く。五節舞は天女伝説とも結びつき、乙女の優雅な舞姿を謳いあげる。

本日は、平成十七年の第五九回雅楽公演「国風歌舞」、平成二十二年の第六七回雅楽公演「神楽歌」に続く、久々の「国風歌舞」づくしの公演である。古代の風景と人々の心を想像しながら、ゆったりと歌と舞の世界に浸っていただければ、と思う。

[文中注]

注一　宮内庁楽部で標準楽譜とする「明治撰定譜」にはこの他、田舞、吉志舞も掲載されているが、現在では演奏されることはないと言う。

注二　春日大社で演じられる和舞では、舞人は青摺の袍を着用する。

注三　荻美津夫『日本古代音楽史論』吉川弘文館、昭和五十二年(1977)。

笙の和音的解明 -下-

藝術院會員　芝 祐泰

下(2)

「凢」の和声　呂和音系統の略型

「凢」の管は壱越音(D)で平調宮笙階名の嬰羽に当る。

壱越音は壱越調の宮音であり、壱越調は古来「呂旋の調」とされてきたので、この「凢」の和音構成は「呂の和音」に因って居る。

先ず壱越(D)を根音とする呂の和音を置き、その外声(五度)に連繋点を求めて呂の和音を三重すると、開離型の和声が構成される。この和音は七声であり且最高音は笙保持音の音域より逸脱して居るので、之を省略したものが「凢」の和声である。

「凢」の和声は壱越曲の宮和声、双調曲の徴和声、黄鐘調曲の律角和声などとして活躍する主要和声である。(譜面1)

壱越音(D)は笙の嬰羽である。依って「凢」の和声は嬰羽、律角、宮の三呂和音の五度上の結合による構成のものである。

「十」の和声　呂和音系統の原型　(但二和音結合)

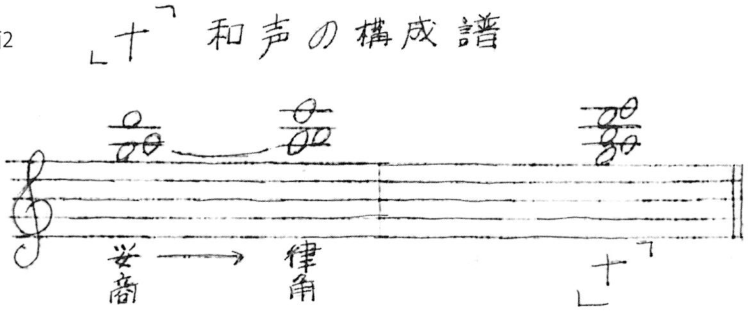
「十」の竹は双調音(G)で、笙の嬰商に当る。双調音は古来「呂旋の調」といわれて来た「双調」の宮音であるので、その和声も呂和音の都合によって構成されている。

先ず双調(G)を根音とする呂和音を置きその内声に連繋点を求めて呂和音を結合すると、五声の密集型和声が構成される。即ち双調曲の宮和声として活躍する、主要和声である。

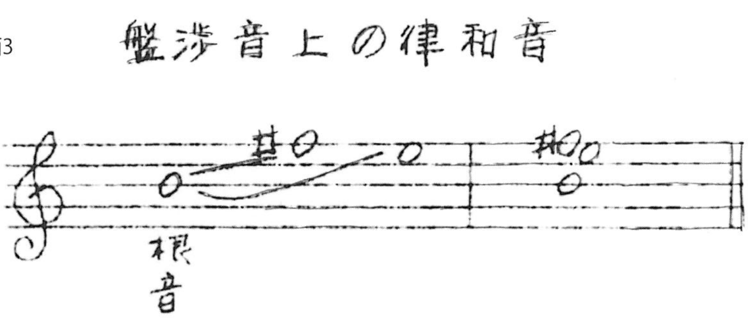
この和声は五声である故に尚一声を付加する事が出来、「下」の竹を添えたものは同じく「十」と云って次項に述べる補助和声となるのである。尚双調曲の補助和声としては「十」の譜字、即ち十の左肩に小点を付して主要和声の「十」と区別されている。(譜面2)

譜面1

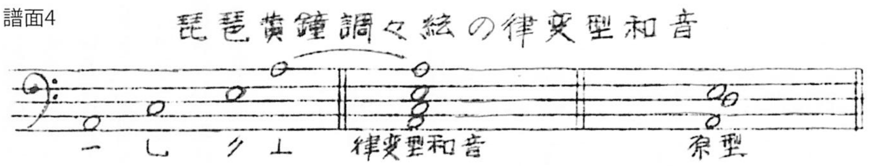
譜面2



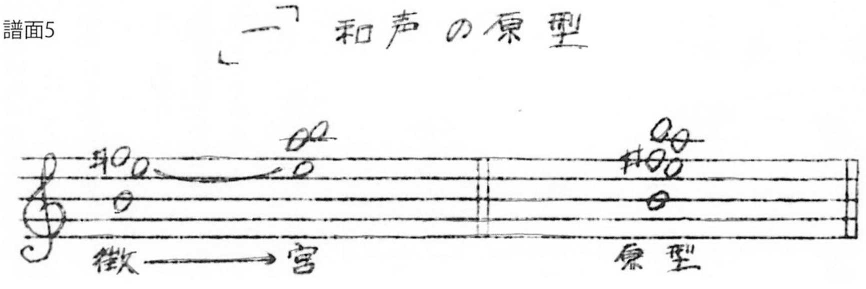
譜面3



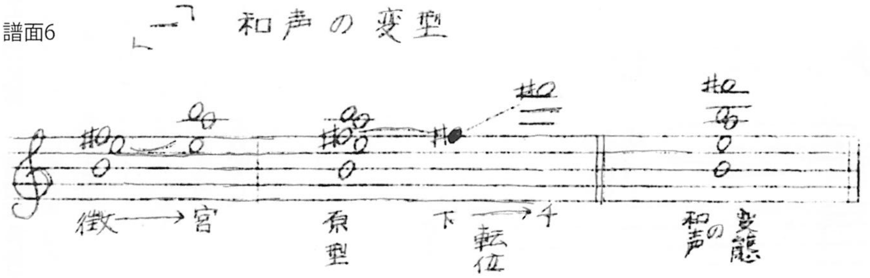
譜面4



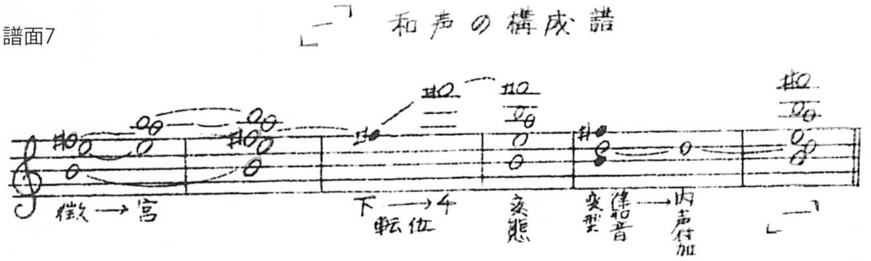
譜面5



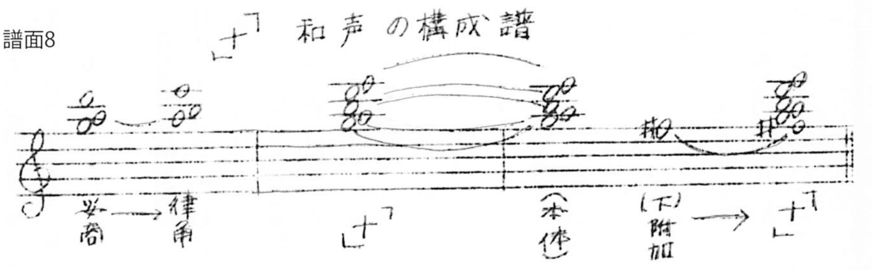
譜面6



譜面7



譜面8



「一」の和声　律和音系統の変態型

「一」の竹は盤渉音（H）で平調宮笙階名の徴に当る律（音）である。盤渉音（H）は律旋の調と定められて来た盤渉調の宮音である故、「一」の和声は律和音の結合による構成である。

先ず基本となる盤渉音上の律和音を構成して見ると「一」（H）、「乙」（E）、「下」（F♯）の三音である。（譜面3）

この盤渉音上の律和音は、笙の指法上演奏不可能なものである。即ち外声の「下」（F♯）と内声の「乙」（E）が共に右食指に配された管で、この二律は同時に奏することが出来ぬのである。

又律の和音に「変型」と云うものがある。琵琶黄鐘調の調絃に用いられて居るもので、律和音の内声が順六律の定位より順四律に変位した型である。（譜面4）

右の二事項を考慮に入れて「一」の和声を調べると、先ず盤渉音（H）を根音とした律和音を置き、その内声に連繋点を求めて平調音（E）上の律和音を結合すると、五声の密集和声が構成される。この和声は「一」和声（相竹）の根音を示す原型である。（譜面5）

この「一」和声の原型には、下無（下・fis）と平調（乙・e）が含まれており、前述の如く演奏不可能な音律が出現した為、和音の連繋点である「乙」（e）を留め置き「下」（fis）をオクターブ上の「千」（fis）にて代用すると次の和声となる。（譜面6）

斯くして五声の開離型和声に変態し、残る左無名指にて盤渉音を根音とする変型律和音の内声「凢」（壱越音（d））を加えて六音和声に構成したものである。（譜面7）

「一」の和声は盤渉調曲の宮和声、平調曲の徴和声、双調曲の呂角和声などとして活躍する主要和声である。

以上「乙、乞、凢、十̇、一」の五主要和声は、いずれもそれぞれの相竹名（和声名）としている音律を根音として、律又は呂の和声二個或は三個の結合により構成されたものである。

補助和声の構成

各調の宮和声として活躍する主要和声（乙、乞、凢、十̇、一）の他は補助和声である。

補助和声については「平調宮の笙」と云う根本義を基としてその構成を考えるべきものである。即ち補助和声は其の和声名とする音律を和声構成の根音としたものではなく、主要和声の省略せるもの、或は主要和声の省略せるものに和声名とする音律を付加して合成されたものである。

「十」の和声　呂和音系統の合成

「十」の竹即ち双調音（g）には、双調曲の宮和声として活躍する主要和声「十」と、各調用の補助和声「十」とがある。（双調曲では左肩に黒点を付して之を表す）

「十」の和声は、呂和音二個の内声連繋によって構成された主要和声「十」に、「下」（下無（fis））管を付加して不協和声に合成されたものである。（譜面8）

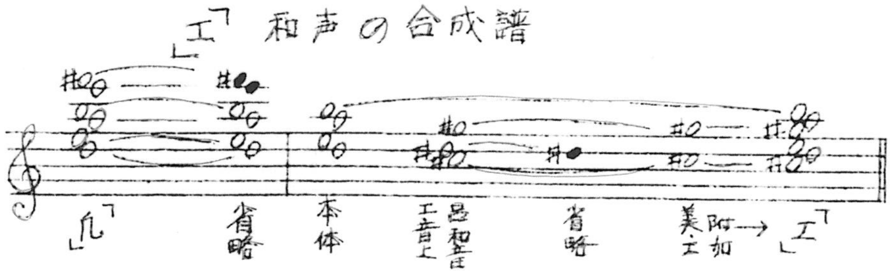
この付加音「下無（しもむ）」（fis）は、協和音「十」を不協和声にし、指法上の充実を計って他の和声との連繋に便ならしめたものである。

「工（く）」の和声　呂和声系統の合成

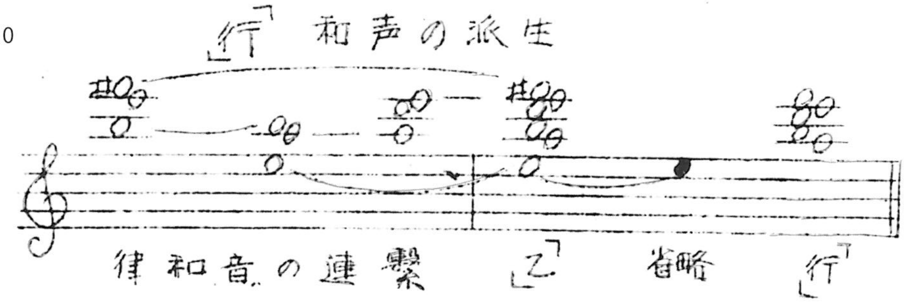
平調宮笙の「羽」に当る不協和声で「凢—工—一」などと「凢」より「一」への経過和声に用いられる。

この和声の本体は「凢」和声の省略されたもので、之に和声名とする「工」（上無（cis））音上呂和音の内声を省略して付加合成したものである。（譜面9）

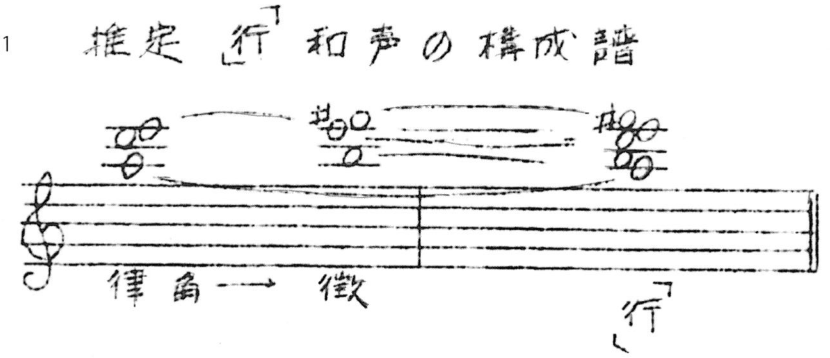
譜面9



譜面10



譜面11



付加される「工」音上の呂和音は、其の内声（断金（d♯））を笙保持音中に備えず、無条件に省略されたものである。

「行」の和声　律和音系統の省略形

「行」の竹は黄鐘音（a）で、「乙」のオクターブであるが、和声としては「行—美下」「行—美　行」などと用いられる補助和声である。この和声には二様の構成が考えられる。その一は「乙」和声の簡単な「根音省略」と云う見方である。（譜面10）

其の二は、和声名とする「行」を根音として律和音を置き、その外声（五度）に新律和音の内声を連繋する構成である。（譜面11）

右の連繋も可能であるが「平調宮の笙」と云う根本義からは、前説の「乙」和声音省略と云う派生和声と見るが妥当と考える。

（つづく）

（小野雅楽会発行「雅楽界」47号　1962（昭和37）年6月10日発行より許可を得て転載。一部旧仮名遣いを新仮名遣いに、旧字を新字に、五線譜に新たに番号を付け、その位置は随時移動した。）

春～夏までの主な雅楽演奏会など

花見の宴　玉前神社境内　（千葉）
3月31日（土）午後2時ごろ
管絃　萬歳楽（まんざいらく）　長慶子（ちょうげいし）　舞楽　迦陵頻（かりょうびん）
長慶子ほか　演奏　玉前（たまさき）雅楽会
問合せ　TEL０４７５—４２—２７１１

男山桜まつり　石清水八幡宮　（京都）
4月3日（火）午後2時
舞楽　胡蝶（こちょう）　萬歳楽（まんざいらく）　還城楽（げんじょうらく）
演奏　平安（へいあん）雅楽会
問合せ　TEL０７５—９８１—３００１

京都御所「一般公開舞楽」　（京都）
4月7日（土）午前10時、11時　2回公演
舞楽　迦陵頻（かりょうびん）　還城楽（げんじょうらく）

京都伝統文化ウィークin二条城　（京都）
4月14日（土）、15日（日）各午後2時より
世界遺産　二条城　国宝・二の丸御殿
曲目未定　演奏　平安雅楽会

永代経　正行寺（しょうぎょうじ）春日山雅楽御堂　（福岡）
4月14日（土）午後3時
　　舞楽　迦陵頻（かりょうびん）　白浜（ほうひん）
15日（日）午前11時半　舞楽　胡蝶（こちょう）
演奏　筑紫楽所
問合せ　TEL０９２—５９６—８５８５

生田祭　生田神社　（兵庫）
4月15日（日）10時～
舞楽　納曽利（なそり）　演奏　生田雅楽会
舞　女人舞楽原笙会（にょにんのぶがくはらしょうかい）
問合せTEL０７８—３２１—３８５１生田神社

梅宮大社　さくら祭（雅楽祭）　（京都）
4月15日（日）午前11時
奉納舞楽　蘭陵王（らんりょうおう）　ほか
演奏　平安雅楽会

花盛祭　丹生都比売神社　神前　（和歌山）
4月15日（日）午前11時45分頃より
舞楽　陵王（りょうおう）　ほか　田島和枝　小林勝幸他
問合せ　TEL０７３６—２６—０１０２

高岡市福岡町さくらまつりの舞楽　（富山）
4月15日（日）12時　無料
高岡市福岡さくら会館前桜並木にて
舞楽　蘭陵王（らんりょうおう）　納曽利（なそり）　管絃　越天楽（えてんらく）　ほか
演奏　洋遊会
問合せ　TEL０７６６—６４—０３９０

桃花祭　厳島神社　（広島）
4月15日（日）午後5時
振鉾　萬歳楽（まんざいらく）　延喜楽（えんぎらく）　桃李花（とうりか）　蘇利古（そりこ）

散手　貴徳　陵王　納曾利　長慶子
問合せ　TEL０８２９—４４—２０２０

名古屋東照宮　大祭舞楽
御創建四百年式年大祭記念　（名古屋）
4月16日（月）午後5時　東照宮広前
舞楽　振鉾　萬歳楽　延喜楽　打球楽　陪臚
陵王　落蹲　長慶子　演奏　東照宮雅楽部
問合せ　TEL０５２—２３１—４０１０

雅楽コンサート　（イギリス）
4月18日（水）大英博物館
舞楽　胡飲酒　芝祐靖復曲　番假崇
平調調子　林歌　越天楽　朗詠　嘉辰　陪臚
演奏　伶楽舎

聖霊会舞楽大法要　四天王寺石舞台　（大阪）
4月22日（日）午後1時より
振鉾　蘇利古　打毬楽　迦陵頻　胡蝶
延喜楽　蘭陵王　その他恒例の供養舞
演奏　天王寺楽所雅亮会有志
問合せ　TEL０６—６７７１—００６６

総本山知恩院　御忌大会　声明付楽　（京都）
4月22日（日）～25日（水）
演奏　平安雅楽会
問合せ　TEL０７５—５３１—２１１１

神楽祭　伊勢神宮　（三重）
4月28日（土）、29日（日）、30日（月）
午前11時、午後2時（午後は雨の時中止）
舞楽　振鉾　北庭楽　胡蝶　長慶子
問合せ　TEL０５９６—２４—１１１１

舞楽　明治神宮　（東京）
4月28日（土）午前11時
舞楽　振鉾　央宮楽　狛桙　長慶子
演奏　楽友会
問合せ　TEL０３—３３７９—５５１１

田祭り　鶴見神社　（神奈川）
4月29日（日）午後3時半
管絃　黄鐘調音取　西王楽
舞楽　登天楽　演奏　横浜雅楽会
問合せ　TEL０４５—５３１—０１５０

大和舞・東遊奉納　春日大社　（奈良）
4月29日（日）午後4時　大和舞　東遊
問合せ　TEL０７４２—２２—７７８８

舞楽神事　熱田神宮　（名古屋）
5月1日（火）10時半～15時
舞楽　振鉾　桃李花　登天楽　央宮楽
新靺鞨　胡蝶　抜頭（左）　還城楽（右）
長慶子　演奏　熱田神宮　桐竹会
問合せ　TEL０５２—６７１—４１５１

聖武祭　東大寺　（奈良）
5月2日（水）午後1時
舞楽　迦陵頻　胡蝶　ほか　演奏　南都楽所
問合せ　TEL０７４２—２２—５５１１

神楽祭　西宮神社　（兵庫）
5月3日（木）午前11時～舞楽　抜頭　胡蝶
5月5日（土）午後1時半～　舞楽　登天楽　還城楽
5月6日（日）午前11時～　白浜
5月10日（木）午前11時～　曲目未定
出演　女人舞楽原笙会
問合せ　TEL０７９７—２３—１８８６

調べ（笙　宮田まゆみ）　（東京）
5月3日～6日　当日一般5千円
東京・両国　シアターXカイ
ダンス　勅使河原三郎　佐東利穂子
問合せ　TEL０３—６２７６—９１３６

斎王代以下女人列御禊の儀　上賀茂神社（京都）
5月4日（金）午前10時～
雅楽奏楽　演奏　平安雅楽会

菖蒲祭奉納　春日大社　（奈良）
5月5日（土）午前10時　りんごの庭　無料
舞楽　甘州
午後1時　万葉植物園　入園料大人５００円
管絃　盤渉調　音取　青海波
舞楽　振鉾　迦陵頻　胡蝶　春庭花　綾切
長慶子　演奏　南都楽所
問合せ　TEL０７４２—２２—７７８８

菖蒲祭　鶴岡八幡宮　（神奈川）
5月5日（土）午後2時
舞楽　曲目未定　演奏　東京楽所
問合せ　TEL０４６７—２２—０３１５

卯之葉神事　住吉大社　（大阪）
5月11日（金）午後2時より石舞台にて
舞楽　振鉾　桃李花　仁和楽　抜頭　長慶子
演奏　天王寺楽所雅亮会有志
問合せ　TEL０６—６６７２—０７５３

御陰祭　下鴨神社　（京都）
5月12日（土）午後3時
切芝神事　東遊　演奏　平安雅楽会
問合せTEL０７５—７８１—００１０下鴨神社

今上天皇御即位三十年奉祝　（秋田）
大日堂舞楽伝承千三百年記念公演
5月13日（日）正午
６千円　５千円　３千５百円
鹿角市文化の杜　コモッセ
第一部　太平への祈り　神々の舞　神子舞
神名手舞　権現舞　駒舞　烏遍舞
鳥舞　五大尊舞　工匠舞　田楽舞
第二部　悠紀の国に捧ぐ　歌舞　悠紀地方風俗
歌舞　越殿楽　貴徳(右)　陵王(左)
出演　大日堂舞楽保存会　十二音会
主催　大日堂舞楽保存会
共催　大日孁貴神社記念事業奉賛会
問合せ　TEL０１８６—３０—１５０４

葵祭　上賀茂神社　下鴨神社　（京都）
5月15日（火）
下鴨神社　東遊　11時40分
上賀茂神社　東遊　15時半
演奏　平安雅楽会

第14回　雅楽道友会「たけの音」　（東京）
5月22日（火）1部・2部合せて２０００円
大井町きゅりあん小ホール
1部　午後3時半
管絃　平調　越天楽　鶏徳　輪鼓褌脱
舞楽　右方　抜頭　延喜楽
2部　楽師会演奏披露　午後6時半
管絃　双調音取　安名尊　鳥破
（延只拍子）　鳥急
舞楽　左方　北庭楽　右方　貴徳

錦天満宮　春季大祭　（京都）
5月25日（金）午後2時
舞楽　納曾利　蘭陵王　演奏　平安雅楽会
問合せ　TEL０３—３７８３—２３７１

伶楽舎雅楽コンサート no.34　（東京）
チケットプレゼント有り
5月25日（金）午後7時　四谷区民ホール
前売３０００円　当日３５００円
管絃　太食調音取　合歓塩　朗詠　嘉辰
長慶子　高麗双調音取　地久　破急
舞楽　萬歳楽　瑞霞苑　演奏　伶楽舎
問合せ　TEL０３—３２００—９７５５

春の舞楽会　六華苑　（三重県）
5月26日（土）午前10時、午後1時
27日（日）午前10時、午後1時
舞楽　喜春楽　新鳥蘇　裹頭楽　納曽利
童舞ほか　主催　多度雅楽会
問合せ　TEL０５９４—４８—３４８４

三千院　御懺法講奉修　（京都）
5月30日（水）午前11時　三千院門跡
声明付楽　演奏　平安雅楽会

大阪楽所第36回雅楽演奏会　（大阪）
チケットプレゼント有り

6月2日（土）
昼の部午後2時　夜の部午後6時開演
3000円（チケットぴあ・劇場窓口）
国立文楽劇場（大阪）
管絃　黄鐘調音取　海青楽　西王楽破
講師演奏　太食調音取　輪鼓褌脱
舞楽　振鉾　桃李花　長保楽　長慶子
問合せ　TEL06—6214—8260

東葛雅楽会　雅楽演奏会　（千葉）
6月2日（土）午後4時　松戸神社神楽殿
管絃　壱越調　音取　迦陵頻急　胡飲酒破
舞楽　蘭陵王　納曾利
問合せ　TEL090—1732—7073

伝統文化「雅楽」に親しむ　（東京）
6月9日（土）午後1時半開講
めぐろパーシモンホール小ホール500円
平調音取　越天楽　陪臚
舞楽　陵王　太食調音取　長慶子
楽器　舞体験　演奏　伶楽舎
問合せ　TEL03—3711—1111

文月会　第22回演奏会　（東京）
6月9日（土）午後2時予定
赤坂区民センター　無料
管絃　双調音取　鳥急　胡飲酒破
舞楽　甘州　延喜楽
問合せ　TEL090—1859—6962

漏刻祭　近江神宮　（滋賀）
6月10日（日）午前11時
舞楽　春庭花　出演　女人舞楽原笙会
問合せ　TEL0797—23—1886

青葉まつり　高野山　（和歌山）
6月14日（木）丹生都比売神社
6月15日（金）午前10時　高野山金剛峯寺
舞楽　陵王　納曾利　演奏　神奈川雅楽部
問合せ　TEL045—931—1714

十二音会第四十回公演　（東京）
6月23日（土）午後6時半
紀尾井ホール　全指定席　5千円

雅楽のための音楽「ロトス」藤田正典作曲
舞楽　雉門松濤楽
「慶祥筵舞」「颯踏」芝祐靖作曲
胡蝶（右方）迦陵頻（左方）
問合せ　TEL03—3370—1913

「和・華・調」シリーズ第一回　雅楽
6月30日（土）午後3時
成城ホール　3500円
盤渉調音取　青海波　平調音取　越天楽残楽
三返　芝祐靖作曲　招杜羅紫苑より
舞楽　蘭陵王　演奏　伶楽舎
問合せ　TEL03—5432—1515

日本薬理学会、国際薬理学・臨床薬理学学会
国際会議オープニング雅楽演奏　（京都）
7月1日（日）午後7時
国立京都国際会館
曲目未定　演奏　平安雅楽会

今昔雅楽集　七夕の宴　（茨城）
7月7日（土）午後5時
水戸芸術館　3500円
芝祐靖　復曲構成　露台乱舞
芝祐靖　復曲　曹娘褌脱
宮田まゆみ作曲　滄海
武満徹　作曲　秋庭歌　伶楽舎
問合せ　TEL029—231—8000

★★読者チケットプレゼント★★

☆伶楽舎　5月25日
四谷区民ホール　5名様ご招待
5月10日必着　招待券を送付
☆大阪楽所　6月2日
国立文楽劇場　5名様ご招待
5月19日必着　招待券を送付

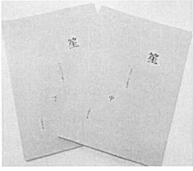
応募資格・「雅楽だより」定期購読者
応募方法・はがきに希望の演奏会、住所、氏名、電話番号など必要事項を記入。
応募先・〒188—0013
東京都西東京市向台町6—12—6鈴木方
「雅楽だより」編集部

上牧・鵜殿ヨシ原
ヨシ原焼き2月25日に無事行われました
篳篥用のヨシが年々減っているのが現状で問題は山積みしています。

上牧・鵜殿ヨシ原で2月25日、ヨシ原焼きが実施された。写真　NEXCO西日本

新刊など

○『笙　初心者のための教則本』中・下
真鍋尚之著の笙の教則本が昨年1月の上の発行に続き今年1月に中、下（付録・五線譜による笙調子）が発行された。
中　3240円
下　3564円
問合せ　TEL03—5902—7281



○『舞うひと』2017年9月刊　淡交社
草刈民代著
1800円＋税
古典芸能のトップランナーたちとの対話

○唐楽全曲譜　4月発行予定
楽中練では唐楽の全曲を掲載した譜面を4月に発行する。予約受付中
問合せ　TEL03—5902—7281

○『日本の楽器たち』2018年1月発行
及川鳴り物博物館
及川尊雄著
A4判240ページ
6800円＋税
問合せ　TEL0424—73—5785

「雅楽だより」
購読・継続　申し込み方法
購読料一年（4回発行）二千円。（送料込）
郵便振込用紙に住所、氏名をご記入のうえ、
[口座番号]　00140—5—614032
[加入者名]　雅楽協議会
までお振込みください。ご記入頂いた住所に「雅楽だより」を送らせて頂きます。

「雅楽だより」第53号
2018（平成30）年4月1日
発行　雅楽協議会
編集　雅楽協議会「雅楽だより」編集担当
連絡先　〒188—0013
東京都西東京市向台町6—12—6（鈴木治夫）
TEL・042—451—8898
FAX・042—451—8897
メール　gagakudayori@yahoo.co.jp
http://www.gagaku-kyougikai.com/
印刷　秀英堂紙工印刷株式会社

雅楽の楽器・譜面　ほか
㈱　武蔵野楽器
〒114—0003　東京都北区豊島1—5—6
電話　03—5902—7281
Fax　03—5902—7282